

大原祐治著『戯作者の命脈——坂口安吾の文学精神』

徳 本 善 彦

本書には注記が付されていない。一方で、巻末には詳細な索引が付されている。このことは、本書がどのような対象に読まれ、どのように読まれるべきか、という著者の希望を表しているように思われる。本書は、一九九六年以降書き継がれてきた坂口安吾に関する学術論文を編集したものであるが、文学研究者以外の読者にも開かれる文体で書かれている。また、作家の出版期から晩年までが、貴重な資料を織り交ぜて見通されており、安吾に興味を持つ多くの読者に広く活用される造りになっている。

本書を構成上の特徴から概観すれば、安吾の文学の表現形式を問題にした第一章から第五章までと、テキストに書かれた「社会批評」的内容を問題にした第六章以降とに分けることができるだろう。この二つを結びつける言葉として、著者は安吾が身を置いた「ジャーナリズム」という鍵語を設定している。そして、そのキーワードは、「歴史」と「現代」という、本書を貫く問題意識にひとつの脈として通じている。ここで、それぞれの章を簡単にまとめていくことにしたい。

「坂口安吾」以前」をまとめた序章に続き、第一章では『言葉』『青い馬』が刊行される中心的な「磁場」となったアテネ・フランセにおける級友との交流について述べられる。ここでは、伊藤

昇をはじめとする若き音楽家たちが安吾の出版期において大きな影響を与えたことが、オーケストラ機関誌の記事などを参照しつつ丁寧に論証されている。本章で重要な役割を与えられるのは「エリック・サティ」という固有名である。安吾や級友たちが特権的な価値のあるものとして扱ったサティの「音楽」に、著者は「風博士」に見られる「非描写的な言語使用」というレトリックの淵源を見出した。この実践は、「海の霧」や「蟬」といったテキストを通じて行われ、「FARCEに就く」における「描写」という問題を突き抜ける「新しさ」の主張へと通じている。

第二章では、「言葉」それ自体の用法にこだわっていた安吾の文学観が転回するポイントとして『櫻』創刊の頃に画期を見出している。ここで問題となるのは、同誌の座談会でも話題とされた、「長篇」を取り巻く同時代の状況である。著者は、この時期に文壇の全体的な機運として「長篇」志向というモードがあったことを明らかにしながら、その一方で若手作家には経済的な問題などから理想の実現が困難であったと述べる。その上で、新進作家・安吾のケースとして「麓」と「狼園」を取り上げ、「筋と筋を積み重ねる」という長篇への構想を浮き彫りにするために登場人物の関係図を示している。さらに、安吾の意図とは裏腹に複数の

「出来事／筋」が増殖し逸脱していることが図式的に論証される。この二つの長篇の挫折は、『吹雪物語』を論じる次章へとつながっていくが、それに先立ち、著者は横光利一「純粹小説論」への応答として「文章の一形式」における「無形の説話者」という方法に注目する。また、日中戦争下における出版界の好況が、安吾に書き下ろし長篇小説の機会を準備したとまとめている。

第三章では、「失敗作」として評される『吹雪物語』の存在価値が吟味される。著者は、同作のプロトタイプといえる「母を殺した少年」と『吹雪物語』の冒頭を比較し、舞台である新渴の同時代状況を考察することで、この長篇で安吾が試みたことを二つ示している。「①物語の舞台となる空間に確固たる強度（リアリティ）を与えること。／②複雑に錯綜する複数の「筋」を自在に統御する語り手」「無形の説話者」の存在を示唆する文体を使用すること。」という基本設定をあらかじめ据えることで、『吹雪物語』が自壊していく様子が徐々に描き出されていく。「ジャーナリズム」に身を置いた安吾が地方新聞の「編集長」を主人公に据え、その周辺を描き出すことは物語にリアリティを与えている。その一方で、モダン都市としての新渴を舞台にすることは、『生活の探求』をはじめとする同時代の「故郷回帰という機運」とは対立する構造になっている。また、ロマンスを描いたはずのこの小説では、ロマンスはそもそも成立不可能なものとして語られている。さらに、その不可能性が示されるタイミングで、「私」という一人称が登場することによって「無形の説話者」の方法が投げ出されている（自筆原稿の改稿履歴を分析することによって示される）。このようにして「基本設定」が次々に投げ出される過

程を通じて、『吹雪物語』が「自壊」していく様相が論述される。しかし、その一方で、「そして誰もいなくなる」という結末で幕を閉じるこの小説において、膨大な「言葉」を浪費し「失敗」が書き上げられたことに、安吾自身が企図していなかった批評性が宿っているとして本章は綴じられる。

『吹雪物語』以降の著作について、とりわけ「文学のふるさと」に書かれた文学論を中心に第四章は展開される。柄谷行人の批評を受けて「ふるさと」に関する議論が中心であったこのエッセイについて、著者は「文学」にアクセントを置いて、文学をいかに書くかという方法論こそが問題だという読解を示した。その上で、同作で取り上げられる芥川の挿話が他の挿話と異質であることに注目し、そこに安吾による操作があることをあらためて明らかにした。さらに、芥川が、「突き放され」るべき経験を言葉で費やして塗り込めてしまったという見立てを「紫大納言」の改稿過程の中にも見出し、安吾の方法論がこの時点では創作に結びついていなかったことを見出している。しかし、「紫大納言」における「気色の悪い」感じは、「イノチガケ」の「シローテ（シドチ）」、さらには「真珠」の「あなた方」へと引き継がれている。生と死を忘れた得体の知れない対象について、そのまま記述し提示しようとする態度は、「文学のふるさと」で示された方法論と通じている。

第五章では、「小説を書く自分自身を小説化するという構造」が問題とされる。著者は、対米英開戦前後の安吾が身を置いた『現代文学』に注目し、新しい歴史小説の構想と、「古都」や「孤獨閑談」に連なる自伝的長篇の計画とを結び付け、安吾の一人称

体の自伝小説が「私」の視点から見た「現代」史という意味を持つていたことを主張する。さらに、安吾の自伝小説の具体的な例として「二十七歳」を組上に上げ、登場人物が実名とイニシャル表記で語られることについて検証する。安吾は、「W」というイニシャルで特定の人物を表記することで、自身を取り巻く「ジャーナリズムの論理」のような外的条件を書き記すだけでなく、それらの条件に規定されながら生きる人間を「小説＝虚構」の中で描くことで「小説的な実在」を表現した。私的な生活領域から一つの時代を切り出し、自分自身や周辺の人物を虚実ない交ぜに動かす自伝小説が、現代史を扱った「歴史小説」であると結論づけている。

第六章では、安吾が一对の男女関係を誰が誰を「所有」するのかという政治の場としてとらえたという見通しのもとで、「白痴」「戦争と一人の女」「青鬼の禪を洗う女」が論じられる。続いて、これらの「所有」をめぐる問題が通底するものとして取り上げられるのが「桜の森の満開の下」である。同作が「歴史小説」として単行本に収められた事実をもとに、過去の歴史を現代の問題へ重ね合わせながら語る安吾の「歴史小説」の書法に照らして読み解かれる。著者は、一对の男女が消失するというこの小説の結末に、戦後の民法改定後であっても「家の歴史」の「所有」を解決しない限りは、新しい「社会」は実現しないという安吾の主張を読み取っている。

このように、安吾が「所有」を「歴史」と交錯させて捉えているという解釈に基づいて、第七章は歴史小説「道鏡」を分析することからはじめられる。著者は、「道鏡」が書かれたことの根底

に、道鏡という人物の内面に空いた「空白」があったとし、安吾が歴史の中にこのような「空白」が穿たれるプロセスを浮き彫りにしようとしたと論じる。また、後に「歴史探偵方法論」で語り直されるこの方法について、「選ぶといふことには、同時に捨てられた真実がある」（たゞの文学）という認識のもとで、安吾が歴史に対する思考を深めていったとする。歴史に対する深い関心は、「安吾の新日本地理」における古代史をめぐるルポルタージュに見ることができる。地理と歴史を交錯させ、過去と現在を結び付ける思考の営為として、「安吾・伊勢神宮にゆく」「高麗神社の祭りの笛」が取り上げられている。

第八章では、安吾が連載中に急逝した「安吾新日本風土記」における「ふるさと」新潟についての言及に触れながら、短編小説「中庸」で書かれた「農村」的メンタリティを問題としている。安吾が「中庸」で提示したのは「公共の観念」を欠落した農村の現実である。このような利己的で排他的なメンタリティを、戦後

日本における社会的構造の問題として安吾は描き出した。一九三〇年代に言葉の実験から始まった安吾の文学が、一九四〇年代の戦争の時代を経て、社会への明確な批評性を発揮するようになったと著者は説く。『文藝春秋』や『中央公論』といったメディアに応じて全国を歩き回ったルポルタージュに、一九五〇年代の時代状況に危機感を強めていた安吾の文学的営為を見出している。

このように、本書は、作家の出版期から晩年までを見通しつつ個々のテクストの読解を結んでいくという構成になっている。安吾のような矛盾を抱え込んだ作家に、一つの「命脈」を見出し一つながりにまとめるという執筆の過程には、多大な労力が払われ

たのではないかと推察する。五〇年前の本ではあるが、本書に先立って批評としての強度を保ちつつ評伝としても読み得る試みとして、奥野健男『坂口安吾』（文藝春秋、一九七二）を挙げることができるだろう。奥野による同書の執筆が、冬樹社刊『定本坂口安吾全集』（一九六八・七二）の編集とその解説を骨子にして全体像を構成していったことと同様、本書においては著者が共同で編集を務めた『坂口安吾大事典』（勉誠出版、二〇二二）の存在が大きいのではないかと想像される。

著者は、「評伝のように通して読んでほしい」と『新潟日報』（二〇二二・八・七）のインタビューで答えている。しかし、その一方で、序章において太宰治『人間失格』の冒頭にある三葉の写真を模倣することで、本書がいわゆる事実に根ざした「評伝」であることを括弧に入れて留保することも忘れていない。これは、奥野『坂口安吾』との決定的な差異であるだろう。このことは、本書の第五章で問題とされた自伝小説における事実と虚構の問題と結びついている。

最後に、著者が発見し、本書刊行後に『新潮』（二〇二三・一）誌上に掲載された「盗まれた一萬円」という「探偵小説」について触れておきたい。本書の第一章から第二章で論じられた、モダニズムから長篇志向へという時代の流れの中で、このような系列の小説が発見されたということ。この発見は、本書では扱われなかった探偵小説、取り分け歴史小説と探偵小説を結ぶ「明治開化安吾捕物帳」へとつながる「戯作者の命脈」もまた存在していることを示唆しているだろう。

〔二〇二二年五月発行 春風社刊〕